

「都市エスニシティ論」の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」

—「創発的都市コミュニティ論」に向けて—

広田康生

Ethnographic Model of Emergent Articulation in Urban Ethnicity : For Emergent Coexistence of Urban Community

HIROTA, Yasuo

要旨：本稿の目的は、「移動／越境」の異質・多様性のなかで、「個人（行為体）」の「生き方」と彼らに節合する人々の世界をフィールドからエスノグラフィックに理解しようとしてきた筆者の「都市エスニシティ論」の枠組みや概念や理論と方法やその都市社会学的「道具立て」を、できるだけ可視化して説明する「モデル」、すなわち「都市エスニシティ論」における創発的節合の説明的エスノグラフィック・モデルとして呈示する。同時に筆者は、この説明のための「モデル」を、筆者の「都市エスニシティ論」に「先行」し、同時期には「コミュニティとエスニシティの主題化において」（奥田, 2004 : 185）として展開した奥田道大の都市コミュニティ論の、「[理念からは] 異質で、見えないものとの脈絡と基盤」（奥田, 1983 : v）を見つけようとしたその「視線」と「立ち位置」に較べることで、「都市エスニシティ論」の「行為体」と「場所・形成」研究の特徴をより良く説明することができる。

キーワード：創発的節合の居場所、説明のためのエスノグラフィック・モデル、表象、偶発性、さまざまな行為体、場所・形成、多元的な叙述、複線的／伏線的な視線、こぼれ落ちるものとの脈絡、示唆される経験

I. はじめに

本稿の第一点は、筆者の「都市エスニシティ論」、すなわち「移動／越境」（トランスナショナルな時代）の人々の「行為体」としての「生きかた」や「のりこえ」を、エスノグラフィやモノグラフィ的に描き出してきた「都市エスニシティ論」の、枠組み、概念、方法、理論の「道具立て」を「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」として説明する試みである。

これまで筆者は、トランスナショナルな時代の「移動／越境」を背景とした「異質性」や「複数性」のなかでの「個人（行為体）」と、彼らに「共振」する人びとの相互作用世界や既成の社会の制度、構造、文化的世界との交差、節合との相互作用を、エスノグラフィックに、さまざまな経験や表象や言説や概念、それを生み出す場面や局面、そしてそれが現実化する創発的な「場所・形成」の過程やここに生まれてくる「行為体」のさまざまなあり方を発見し、それを多元的に叙述する方法とその理論的考え方を、いくつかの拙論、拙著のかたちで描き（広田, 1997 ; 2004 ; 広田・藤原, 2016）、それらの意味を拙論で推敲してきた（広田, 2022 ; 2023）。

本稿での第二点目は、筆者の「都市エスニシティ論」に「先行」し、「移動／越境」の同時期に「コミュニティとエスニシティの主題において」展開した奥田道大の「都市コミュニティ論」（奥田, 2004 : 185）の「視線」と「立ち位置」が「都市エスニシティ論」に「開いた道」と課題を明らかにし、（筆者としては）それに関連して、奥田道大が「都市エスニシティ論」の課題として示唆した——「個人」としての側面に焦点をあわせた都市エスニシティ論から導かれてくる研究者の側の認識の変容とはなにか」という課題（奥田, 2004 : 188）——に関する筆者なりの「考え方」を明らかにする。

以下本稿では、IIで、「都市エスニシティ論を説明するための創発的節合のエスノグラフィック・モデル」と題して、[1]. 「創発的節合のエスノグラフィック・モデルの経緯と居場所」と題したその [1.1] で、本稿で対象とする筆者の「都市エスニシティ論」の経緯を簡潔に説明し、[1.2] で、移動、越境する「個人（行為体）」と「共振者」を理解しようとする筆者の「都市エスニシティ」の居場所と「立ち位置」を説明する。[2] では、「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」と題して、その [2.1] で、「移動／越境」する「個人」から出発した筆者の現実的理由と、「移動／越境」の時代の「創発的世界」を捉えるための起点としての「異質性認識」の重要性を理解するための、「個人」の記憶や表

象や「物語」や言説や経験を含めた「多元的な叙述」が必要な理由について説明する。相互作用のさまざまな「場面」やそれぞれの「局面」で筆者が気付く言説や表象や、それを生み出す偶発性や「一時的（たまたまの）縫合（temporarily sutured）」（Smith, 2001: 132etc）を含む諸概念の意味を含め、「個人」の「生（なま）」の調査経験と理論の世界を繋ぐ、いわば構築主義的な考え方や理論をエスノグラフィックな方法で支える試みが、「個人」を起点にした「都市エスニシティ論」の、制度や構造と「創発的節合」を見つける方法として、ひとつの認識の変容としての役割を果たすことを、筆者の課題への考え方のひとつであることを確認する。そして [2.2] では、上記の「個人」と「個人」との「創発的節合」を創り出す起点としての「異質性認識」とそこから生まれてくる「創発的節合」や「共振」と、それを支えるさまざまな「行為体」の発見や、彼らを取り巻く既成の構造との創発的節合を見つける、その時間のかかるエスノグラフィックな方法こそが「創発的都市コミュニティ」を発見し、奥田道大が「開いた道」あるいは「コミュニティから示唆される諸経験」や課題への、「都市エスニシティ論」からのひとつの方法であることを示唆する。そして [3] の [3.1] ではその具体的な「場面」や「局面」や「行為体」に出会う経路を説明し、[3.2] では、中間的な総括として、方法の意味を再度まとめる。

本稿Ⅲでは、「[都市エスニシティ論]と[都市コミュニティ論]」と題して、[1] の [1.1] では、筆者らの「都市エスニシティ論」に「先行」した奥田道大の都市コミュニティ論の枠組みと方法論を、特に「コミュニティ・モデル」の「理念からこぼれおちるもの」（奥田, 1983: v）——それが初期の奥田道大の「異質・多様性」の意味であると筆者は考える——と、「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を、その「モデル」の「臨界点」にまで「見きわめ」ようとした奥田道大の「方法論」（奥田, 1983: iii）を、「都市エスニシティ論」にとってはその「道を開いた開拓的研究」として論じ、[1.2] では、筆者の「都市エスニシティ論」にとっては「示唆される経験」のひとつとなった奥田道大の「自由回答方式」を主体とした「調査票調査」とフィールドワーク、「調査のやり方に関する考え方に潜む感応力や洞察力を含めて再考する。そしてさらに、筆者の「都市エスニシティ論」には特に重要な問題として、[2] では、「都市コミュニティのアーバン・エスノグラフィと都市エスニシティ論の創発的節合のエスノグラフィック・モデル」と題し、その [2.1] で、奥田道大の「コ

ミュニティ・モデル」と、1994～95年ごろを境に展開したそれとの「コミュニティとエスニシティを主題」とした時代の都市コミュニティ論の「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」への視線が、エスノグラフィックな感応力や「多元的な叙述」の方法を求めながら、もともとひとつの「共有価値」を土台にした普遍性や理念性に依拠するその「立ち位置」が、「移民／越境」の時代の、複数的な「共有価値」が問題にされる時代のなかで、いわば初期の「モデル」とその後の「コミュニティとエスニシティを主題」とする都市コミュニティ論との「連続と不連続」（奥田, 2004: 195）に直面した事情について述べる。そして筆者としては、それが、最終的には「移動／越境」の時代に重要な役割を果たす「異質性認識」の問題を「ふつうの都市コミュニティの様相」として定義しながら、「コミュニティ・モデル」の理念や普遍としての「都市共在感覚」へと進んだその軌跡（奥田, 2009: 132etc）と、筆者の「都市エスニシティ論」の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」との立場の違いを考える。そして [2.2] では、「コミュニティとエスニシティを主題化」とした都市コミュニティ論の時代と、筆者の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」として整理する「都市エスニシティ論」とのふたつの「モデルの特徴」を、あくまで「都市エスニシティ論」の立場から、その対象、研究者の立ち位置、モデルの焦点、そして時代の異質・多様性の見方、方法、構造への接近のしかた等々において簡潔に整理し、「都市エスニシティ論」の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の意味とともに、本稿の副題に記した「移動／越境」のなかでの「創発的都市コミュニティ論」につながる道を考える。

Ⅱ. 「都市エスニシティ論」を説明するための「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」

1. 「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の経緯と居場所

1.1 本稿で対象とする筆者の「都市エスニシティ論」の諸論・著書について

本稿で「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」として描く筆者の「都市エスニシティ論」の拙論や拙著は、1991年ごろでの横浜市での地区センター調査での調査経験とその拙論を土台に（広田, 1992）、特に都市エスニシティを明確にタイトルとした拙論「都市エスニック・コミュニティの形成と適応の位相について」（広田,

1993)、そして、藤原法子氏との共著で横浜市鶴見区U地区での日系ブラジル人の経験を中心としたエスニシティに関するフィールドワークの記録としての拙論「ある調査の記録」(広田・藤原, 1993)、そして奥田・広田・田嶋編『外国人居住者と日本の地域社会』(明石書店, 1994)¹⁾に所収の、「都市エスニシティ論」の「生き方」をまとめた「Ⅳ 日系人家族の生きかた」(同書, 192-257)、そして「エスニシティ再生論」を背景とする、アメリカでの「新移民」に関するシカゴ学派のエスニシティ論の動向や方法に関する「Ⅵ アジア系新移民調査研究の視点」(同書, 304-347)、そして翌年、松本康・奥田道大・佐藤健二・吉見俊哉・吉直哉の編で刊行された叢書のなかの、奥田道大編『21世紀の都市社会学 [第2巻] コミュニティとエスニシティ』(勁草書房, 1995)に、エスノグラフィックな調査をもとに考察した拙論「エスニック・ネットワークの展開と回路としての都市——越境する人々と日常実践」(同書, 191-239)、そしてそれらの拙論をその後の展開を加えてまとめた拙著『エスニシティと都市』(有信堂, 1997)、そして、その拙著そのものはその後、内容のほとんどを残したが、その後のフィールドワークの展開を加え、最後の章に「トランスナショナリズム論」の論考を入れて「新版」として刊行した拙著『[新版] エスニシティと都市』(有信堂, 2003)、そしてその後、広田康生・藤原法子共著『トランスナショナル・コミュニティ—場所形成とアイデンティティの都市社会学』(ハーベスト社, 2016)、そして今、その「都市エスニシティ論」の「フィールドワーク」での意味の整理と「推敲」を試みている拙論(広田, 2022; 2023)を、本稿での筆者の「都市エスニシティ論」の素材としている。これらが本稿での筆者の「都市エスニシティ論」を、説明するための「エスノグラフィック・モデル」の中核的な骨格をなす。本稿での筆者の拙著や拙論で描いてきた「都市エスニシティ論」の枠組み、概念、方法、理論の「道具立て」を説明する「エスノグラフィック・モデル」は、主に以上の拙論や拙著を対象としている(なお、筆者としては、1983年から1987年まで、自分もその一部に参加した、奥田道大を中心とした『調査報告書』(東京都生活文化局や板橋区で刊行された報告書)については、「示唆される経験」として本稿Ⅲで触れることにする)。

1.2 「都市エスニシティ論」の「創発的節合」の居場所

はじめに、筆者の「都市エスニシティ論」研究全体を象徴する「創発的節合」という概念について説明をして

おきたい。それは、筆者の「都市エスニシティ論」の「立ち位置」や研究の居場所にかかわる問題である。

筆者自身の「移動/越境」の人びとに関する「都市エスニシティ論」は、受け入れ側の既成の「共有価値」を当然とする世界が、いわばホスト社会側として、それとは異質な構造や文化を持つ「移動/越境」の人びとを、どのように受け止め、理解しようとする方法を考えるという「立ち位置」にいるわけではない。筆者の「都市エスニシティ論」の「立ち位置」は、「移動/越境」する人々と彼らに「共振」する人々、そしてその人々をとおして関わる既成の制度や構造が、互いの「異質性認識」の変化や「共振」をとおして、それぞれの異なる「共有価値」を変化する世界を「創発的世界」と呼び、そこに自身の研究の居場所を求めている。あるいはその上記の相互作用的な世界を「コミュニティ的世界」と呼べるなら、その「コミュニティの世界」が、「移動/越境」(たとえそれが記憶にもとづく越境ではあっても)を機に、「異質性認識」の接触や、相互作用の困難な過程——筆者はそれをフィールドワークのなかで生まれた概念である「異質性認識」の困難な過程と呼ぶ——が生み出す、さまざまな節合の世界を「創発的節合の世界」として呼んでいる。

わざわざこの問題に触れたのは、単純に言えば、既成の世界に立って越境する人々を受け止める立場は、いかに「共生」や「共存」や「共在」といったさまざまな言葉を使用しても、そこには、往々にして「同質性」や「同化」を当然とする世界に行きつくと考えている。しかし、異なる世界からの「移動/越境」する人びと(と「共振」する人びとそして既成の制度や構造)の「異質性認識」にもとづく節合は、既成の制度を、何らか「攪拌」し、改めて新たな「共在」を「創発」することになるという立場に立つというのが、筆者の「都市エスニシティ論」や「移動/越境」の「創発的節合」や「創発的都市コミュニティ」の意味である。無論実際には、「移動/越境」する人びとは、どのような場合でも、受け入れ社会の構造や文化からの「包摂/排除」の過程に直面するが、しかし、その一方で、この「移動/越境」にもとづく「異質性認識」の過程は、彼ら同士(と共振する人々のあいだに)互いのアイデンティティや「場所-形成」や記憶や歴史的経験に変化をもたらしつつ、相手の異質性認識のなかに自分を見つけ、自分の異質性認識のなかに他者を投影する困難な過程を常に続けていくことで(Gilroy, 1996=1998: 147; 広田・藤原, 2016: 34; 広田, 2022: 63 etc)、われわれに何らかの「創発性」を

呼び起こす、と筆者は考えている。互いのアイデンティティや「立ち位置」を相互作用する過程を「異質性認識」の過程と呼ぶなら（広田, 2022: 63 etc）、その過程のなかでの「日常実践」をとおして、異なる「表象」や偶発性や「たまたまの縫合」をその内に受け止め、時に一方的で当然とされる「包摂／排除」に気付き、それを「のりこえる」きっかけや互いに親和性や理解や「共振」や節合の機会を生み出すという立場に立つ。そうした考え方や可能性を踏まえて、「移動／越境」の過程に、新たな世界が創り出される過程をここでは「創発的節合」という言葉を当て、そのきっかけをエスノグラフィックに探ることが筆者の「都市エスニシティ論」の研究の居場所、あるいは、筆者の「都市エスニシティ論」の居場所と考える。

2. 「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」とは

2.1 「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の出発点としての「個人（行為体）」

前述のように、「移動／越境」の人びとや、互いに相互作用し時に「異質性認識」の過程にいる人びとやそれを取り巻く既成の制度や構造との相互作用を見る筆者の「都市エスニシティ論」の枠組みや方法や概念といった「道具立て」を、人に説明するためひとつの試みとして本稿では、説明のための「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」という言葉で表現したい。

その出発点として筆者が、「移動／越境」のネットワークや集団や組織や構造からではなく、「移動／越境」する人びとと、かれらに接し相互作用に入る人びとの「個人（行為体）」にエスノグラフィックな目を向けたのは、なぜか。ひとつの現実的な理由としては、拙著（広田, 1994；1997；2003 etc）や拙著（広田, 2022）で再三記したように、特に1990年代の日本で見られた「移動／越境」の現実的な「個人（行為体）」が、それまでの「競争-闘争-適応（応化）-同化」という、構造的に規定された過程にあるというよりは、アメリカでの「新移民法改正」以降のいわゆる「新移民」の「あり方」と同様に、特に筆者が鶴見その他のフィールドの場所で出会う「個人（行為体）」の「生きかた」やその独特の経験に関しても、それじたいから考えてみる必要があると感じたからである。「移動／越境」によって異質な世界に適應する人びとの在りように関しては、研究動向としても「適應すれども同化せず」という現状が指摘され（広田, 1994：304-347=奥田・広田・田嶋編, 1994所収；広田, 2003：60-71 etc）、そして何よりも、「越境者-エスニ

ティ」と彼らに相互作用をする人々の「個人」の言説や「物語」のなかに、現在の「批判」と実践を読み取り（広田, 2022: 65）、彼らの人間的な「創発的」なつながりを理解しようとしたことがあったからである。以上の状況や研究者としての関心も含めて（その意味は後述する）、それをエスノグラフィック的調査の連続的な「場面」をつなぎ、広げて（もちろん比喩的であるが）、その「創発的世界」を描く方法を取ったのはその意味である。その意図としては、（その言説や経験や記憶や偶発性等々がそこに絡んでくる現実を理解しようとする）この方法そのものが、筆者にとって、自分自身がエスノグラフィックに経験し記憶を呼びおこす言説や事例をとおして、その社会的世界の形成過程そのものを読み取ることと関係しているという認識があった（広田, 2003: 4）。

もうひとつ、もう少し理論的な理由としては、前述のように、「都市エスニシティ論」における、個人の記憶や物語や言説や経験や出来事を研究のなかにいれて、そこで「創発的」な相互作用を理解するためには、「個人（行為体）」の構造に規定される側面の構造機能的分析に加えて、「移動／越境」の人々や彼らに相互作用をする人々の「異質性認識」の、歴史的、社会的、文化的な記憶や独特の経験、アイデンティティの在り方、瞬間的な感情や情緒の発露も含めた相互作用のなかで、どのような意味の「行為体」が生まれ、それらの実践や「共振」のなかから（瞬間的ではあっても）「創発的節合」が生まれるか、そしてその「個人（行為体）」が、既成の構造との交差や節合が、そのような「場面」や「局面」でどのような言説や出来事や事例を提起し、その「あり方」を目の当たりにし、理解したいという研究の目的がある。それには、「個人（行為体）」の主体性や感覚や記憶や表象や言説や経験に接触するために、それがいつ起きるかがわからないような「時間のかかる方法」ではあっても、フィールドワークやエスノグラフィックも含めた方法的立場が必要であると考えている。「異質性認識」という相互作用や既成の制度や構造と相互作用の「創発的節合」に目を向けるためにも、「移民／越境」とのエスノグラフィックな過程や、既成の制度や構造が「進行中の生活のなかに徐々に入り込み、その支配力を拡大する場所」（Geren, 1994=2004: 60）や「場面」「局面」での諸個人の言説や事例への視点や参加が必要になる。それを現実世界の中に立って多元的に叙述するには、構築主義的な考えかたや、エスノグラフィックな方法にもとづいて「個人（行為体）」の「存在のしかた」やその言説や出来事や事例をいくつも積み重ねて、多元

的に叙述を試行する「時間がかかる方法」が必要になる。筆者としては、まさにこの過程においてこそ、前述のガーゲンがフーコーの言葉を引用しつつ、「言語を批判的に吟味することを通じて、われわれは、文化内のさまざまな関係性を理解し、それによって新たな未来について考えることができ……批判を、言語に潜む偏った関心を暴露するものとしてではなく、言説そのものの実践的な意味を明らかにするものとして捉える」(Gergen, 1994=2004: 61) ことが研究の意味であると考えている。筆者の「都市エスニシティ論」にとっては、構造機能分析と同時に、その認識論を支える理論としての「エスノグラフィック」な方法と構築主義的思考の助けが、筆者の「都市エスニシティ論」には必要であると筆者は考えている。

2.2 「移動／越境」の「個人(行為体)」の「異質性認識」と「創発的都市コミュニティ論」

「個人(行為体)」に直接の眼を向けた理論的、方法的な理由を、筆者の本稿での副題である、越境の都市コミュニティ論の「創発的コミュニティ」という問題に関連させて、そのもうひとつの理由をいえば、筆者は、「都市エスニシティ論」が、都市コミュニティ論の主要な枠組みや集団や組織、制度への観点と同時に、個人の記憶や言説を含めた経験がもつ身体性や感覚への注目も必要であるという意見にも同意したい(佐藤, 2011: 118-119)。当時の都市コミュニティ論の調査に関連してその意見を述べた佐藤健二は、都市コミュニティ論につきのように指摘をしていた。「人々の感覚(五感の感受性)、記憶(歴史的意識)、実践(身ぶり／しぐさ／作法／行動様式)の平面上にあらわれてくる効果に焦点を当ててような方法論的な視座の拡大が要請される」(佐藤, 2011: 120)。この問題に関しては、筆者の「都市エスニシティ論」の「移動／越境」のひとつと彼らに相互作用する人々にとっての「創発的節合」の捉え方にとっては重要な指摘であると筆者は考える。

前述のように、「移動／越境」を前提として、互いに異質、複数性のなかで生きるさまざまな「移動／越境」する人々と彼らに接し相互作用する人びとの「異質性認識」を起点に「創発的節合」を生み出す世界を生み出す人びとの存在と、彼らが記憶(歴史)や表象や言説や実践そしてそれぞれの「局面」や「場面」の偶発性や「たまたまの縫合」に影響を受けつつ、さまざまなかたちの「個人(行為体)」の出現と「場所-形成」過程、特にここでは「場所」はその本質論を問うというよりは、これ

らの表象化や言説や事例や出来事等々によってさまざまな「意味の空間」や変化する「オーセンティシティ」の現実を理解するためには「場所-形成」という言葉を使いたいと筆者は考えている(広田・藤原, 2016: 38-42, 100-116, 175-189 etc)が、それぞれの多様な「場面」「局面」において、さまざまな意味での「行為体」となる過程(そしてここに既成の制度や構造や文化的世界と交差し節合する過程)を、エスノグラフィックに観察し経験する「都市エスニシティ論」を説明するための「モデル」としての「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の意味である。

現実には「移動／越境」の「都市エスニシティ論」の現実世界のなかで、こうした「創発的節合」の「場面」や「局面」を意識しながらフィールドワークをしていると、既成の構造に規定される側面だけではなく、記憶や言説や事例そのものや、そうした「進行中」の実践に出会う。フィールドを常とするフィールドワーカーなら、これまでのフィールドワーク経験から事物や行動や風景に関する記憶や歴史的出来事や経験や概念や理論が生まれ、その「場所-形成」の変化する意味を考え、彼ら自身の表象や言説や事例の意味を考える手がかりに出会うことがある。こうしたフィールドでの調査の「生(なま)の経験」とおして、言説の意味を、現実や歴史や「生活記録(ヒューマン・ドキュメンツ)」をおして推敲し「多元的に叙述」し、その相互作用の過程をいくとおりにも理解し考察し、「移動／越境」の「創発的コミュニティ」世界の構造を探し、その構造の意味を探すことの過程とする。ここで筆者は、フィールドワークのなかで出会う「生」の個人の主体性や言説に関する経験的研究と理論的研究は、どちらが上に立つかという関係性にあるとは考えていない。むしろそれを繋ぐようなきっかけを見つけることもエスノグラフィの理論化の過程であると考えている。「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」としたのはその意味もある。

3. 「都市エスニシティ論」の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」を見る方法

3.1 「都市エスニシティ論」の主題、枠組み、方法、場面の可視化

——「語りのための説得力ある言説と事例」の場面を見つけるために

筆者の「都市エスニシティ論」の研究主題では、「移動／越境」の「個人(行為体)」の「生き方」や異質な世界の「のりこえ」の仕方やさまざまな「行為体」とし

での「ありかた」を知ることが目的である。したがって、それはどのような「場面」や「局面」で生まれ、それはどのような言説や経験をとおして、さまざまな「行為体」や「場所-形成」を生み出すのかを、どのような試みをしたのかを述べたい。

前述のように、筆者の「認識的枠組み」の特徴は、「移動/越境」の「個人（行為体）」と、彼らに接触しあるいは共振する人びとによる「異質性認識」から生まれてくる「自己」と、彼らの「共振的」な「日常実践」がどのような「創発的節合」を生み出し、そして、既存の制度や構造とのあいだでどのような「創発的節合」を生み出すかを、彼ら自身の表象や記憶（歴史的経験）や偶発性や「たまたまの縫合」も含めて考えることが、「認識的枠組み」の方法になる。もちろんここには、特にその時の「認識的枠組み」や方法を支える理論としては、前述のように構築主義をエスノグラフィックな方法で支える考え方に依拠している。本節では、特に、筆者の「都市エスニシティ論」の研究の要旨を説明するために呈示した「創発的節合のためのエスノグラフィック・モデル」の、特に、筆者のこれまでに行われた具体的な「エスノグラフィックな調査方法」の「場面」や「局面」だけを取り出して簡潔に説明しておきたい。

前述のように筆者の「移動/越境」の「都市エスニシティ論」の研究では、具体的には幾つかの現実的な「場所」での幾つかの「場面」を繋いで、「エスノグラフィック」なフィールドワークを重ねて、その「場面」での「個人（行為体）」の意味を読み解き、その理論を推敲することに特徴がある（その「場面」を理論的に繋いで移動しつつその研究を繰り返す）。

筆者のその「エスノグラフィックな方法」は、実際には、拙著（広田, 2003）そして共著（広田・藤原, 2016）にその一部を記録し、その「方法」については、その後の拙論（広田, 2022 ; 2023）で、「語りの説得力ある言説と事例」を見つける方法として説明した（広田, 2023）。前述のようにそこでの「エスノグラフィックな方法」の重要な「目線」や「見きわめ点」は、筆者の「都市エスニシティ論」で紹介したいいくつかの「場所」に共通に出現してくる幾つかの「繋留点」「結節点」での「場面」と「局面」にあり、それを繋いで出現する世界を見つけることにある。筆者は、その幾つかの「場面」とそこから見えてくる「異質性認識」にかかわる相互作用や節合を、彼らの記憶や言説や出来事や、筆者の（経験にもとづく）表象や「生活記録」やそのつど必要な文献、そして「局面」に影響を及ぼす偶発性も含めた

瞬間的な「行為体としてのありかた」を経験し、その「場面」や「局面」を繋ぎ合わせて、そこから、その意味を考えることである（筆者が場所や場面を繋いでひとつの世界を描いた事例は未熟ではあるが「図」として説明したことがある）（広田, 1997 : 2003 : 116・116）。

したがって筆者のエスノグラフィックな研究の第一は、幾つかの「場面」に注目することが重要になる。第一に筆者が重要としたのは、それぞれの「場面」や「局面」に言葉や記号や感情やふるまいとして出現する「行為体」やその記憶や行為、彼らの「創発的節合」を示す「語り」や行動と事例に出会い、さらにその事例を推敲する（もちろん彼らの言説や彼らの経験に影響を与えている社会的、文化的、歴史的な記憶はまさにさまざまな「生活記録」を含めた史資料・文献との出会いにも依存する）、第二に、筆者が重要視したのは（そして節合を知るためにはこれが最も重要であるが）、「個人（行為者）」同士の「創発的節合」の土台になる「異質性認識」の生の過程であり、その「創発的節合」とそれが「創発的な集合」やネットワークや「創発的なコミュニティ」として出現する「場所-形成」の過程であり、そこにどのような、さまざまな「行為体」としての「ありかた」が生まれてくるのかを見ることである。それは、その瞬間に出会うことができなくとも、それは、長い時間をかけて（時にそれが10年間隔の出会いであっても）、彼らの言葉や行動や事例や記憶に関する言説、そしてここから表象し確認し、考察につながることもある。最後に、筆者の場合の重要視した第三点目は、こうした言説や事例を重ねて、いかにそれらを「多元的な叙述」としていろいろな形で呈示する「叙述の過程」である。これには、時間をかけて推敲を重ねる以外には筆者にとって要領の良い手法は思いつかない。

説明のための「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の設定上、今述べた「場面」や「瞬間」や「経緯」を可視化してみれば、以下の[囲み図1]「都市エスニシティ論」の「行為体」と「場所-形成論」への研究経緯——「異質性認識にもとづく節合」のエスノグラフィック作業と理論化への過程（34頁参照）にその一部が示される。ここでの重要な「場面」や幾つかの「個人（行為体）」の事例や、「異質性認識」や「創発的節合」を示す言説や偶発性や表象や出来事は、筆者らの拙著や拙論のなかに掲載され、筆者らの幾つかの「場所」での「場面」での言説は繰り返し出現している。

以下、「場所」での、特にそれぞれの「場面」や「局面」、筆者からの角度からの「さまざまな行為体」の出

現は、どのような構造との節合のどのような事例となって表れてきたのか。具体的に気付いた点をいくつか説明をすれば次のようになる。

第一に、「囲み図」に掲載したように、「移動／越境」の「個人（行為体）」の存在や、「創発的場面」や「局面」、そしてそこでの「異質性認識」の相互作用や節合、彼らの「行為体」としての「ありかた」を知るための多様な言説、そして「場所-形成」過程に出会い認識するための「通路」となる「結節点」や、そしてそうした「結節点」としての「個人」をとおして、上記の「場面」や「局面」や「個人（行為体）」の出現や言説に出会うことが必要である（広田, 1997; 2004）。「囲み図」で、「ある行為体への認識過程事例①～⑥」に示したように、それぞれ違う「場面」から始まってはいるが、たとえば①で記載したように、「コミュニティ施設」からその人の「家」、そこでの家族への「移動の物語」に出会い、（そこには掲載を省略しているが）そこから別の「学校」での児童生徒の「移動の物語」に出会い、彼らの創った「アソシエーション（日系人の組織）」でのフィールドワークを繋いで「個人」や彼らの「異質性認識」の節合や、それぞれの「局面」でのエスノグラフィックな言説や出来事や事例との出会いを繰り返す。そしてここからの言説や事例を得て、筆者の理論的目的に新たな「洞察」が得られそうな（時にはまったく偶発的に洞察が得られることもある）人々や「結節点」でフィールドワークをし、別の「場所」、たとえば群馬県〇町や東京新宿、そして、時には、「文献」をとおして「初期トランスナショナルリズム論」にあたりと想定し表象した山口県での「S.O 島」や「O 島」からの「布哇ホノルル」への移動には、横浜での歴史的な「移民宿」を経営した人へのフィールドワークを背景に、それが、布哇ホノルルでの特有の「記憶」や言説に結びつき、そして、N.Y.でのE-地区での「物語」や異なる「行為体」と「場所-形成」に出会うといった繋がりがあった。そしてここからたとえば、「物語を産出する行為体」や「共振的行為体」や「場所-形成の行為体」といった存在に出会ったと筆者は考えている。それらの結果は、こうしたエスノグラフィックな移動研究の経験から出会ったものである。そしてそれらは、「場所-形成」の新たな側面として、新宿コリアタウンの「イスラム・スポット」での「場所-形成の行為体」の出現と既存の制度的場所との「オーセンティシティ」同士の「場所-形成」の「軋轢」も含みながらの新たな動向になると筆者が考えるこういった新たな「場所-形成」の発見は、筆者が初

めに出会って10年をへて再会した時に彼らの言説や、彼らをとおして出会った既成の制度としての町内会や商店会長等々の言説や周囲の移動の「移動の装置」を確かめて得られたものである。その「装置」には、筆者が過去に行ったフィールドワークに関する記憶や別の場所の「結節点」でのフィールド経験や同上の節合や「局面」や言説や出来事等々のエスノグラフィックな経験があった。

ここでの「場所」や「場面」や「行為体」の意味について筆者は、後に次のように考えている。すなわち「[場所とは] そこに特有の内化化した歴史や沈殿した性格からだけ生み出されるものだけではなく、現在の社会関係や社会過程や経験等が同時に存在すること、及びそれに関する理解からつくりだされるものであり、しかもこれらの関係の大部分は、限定された地域にだけ現れるものというよりはより大きなスケールのなかで構成されたものとして考えられる関係が集う状況」であると、考えている（Smith, 2001: 107; 広田, 2016: 38）。その「結節点」としては、先住者の各種移動の「装置」（エスニシティ・アソシエーション、新聞組織、ブラジル人学校等のエスニック・スクール、旅行代理店、送金業、親睦団体 etc.）、「移動／越境」の居住地での学校、地元の「コミュニティ施設」、（たまたまの縫合）の「ストリート的一角」、職場、「家」じたい等々が、その結節の場所になる。ちなみに、前述のように、筆者の場合の「エスノグラフィ」の起点は、横浜市鶴見U地区であり、具体的に言えば横浜市自治体との別の仕事で偶然にインタビュー調査に出かけた「コミュニティ施設（児童館）」のなかで、移動することもたちに出会い、その組織の担当者を通じて、彼の家での、「移動／越境」の「帰還移民」といわれるW氏に出会った〔筆者の調査の経緯については（広田, 1997; 2004: 58-59）参照〕。いわば、出会う場所としての「コミュニティ施設」からその家に移動し、そこで両親のいわば「移動の物語」に出会い、彼らの歴史的経験の記憶や「移動／越境」の経緯や経験、戦争後にふたたび南米に移動をした経験と記憶、そして今いわゆる「帰還移民」の出稼ぎとしての存在、日本での彼の乗り越えの希望と「批判」を含めた言説と経験のなかに「異質性認識」の経験を認識した。それは、「異質性認識」の「創発的な節合」の「場面」や「局面」のひとつであると考えている。もちろん鶴見U地区の歴史性や経験については、後に「生活記録」や文献からもその歴史性を学んだ（広田, 1997; 2003; 2021; 藤浪, 2021）。おそらくは、こうした諸言説のなかに、構造へ

の「批判」を感じることはそれほど難しいことではないと感じている。彼のなかに筆者は、構造機能的な位置付けと同時に、今の彼の「移動／越境」の意味や「異質性」を乗り越えようとする「物語を産出する行為体」としての存在を感じている（広田, 2022）。

第二に、上記の「場所」からもうひとつの「結節点」についての事例も挙げたい。それは、「移動／越境」の人々に出会って自分との経験に呼応し、彼らへの感応や、彼らへの「同行的支援」や過去の経験と記憶等をつうじて、いくつかの学校や自治体やその他の行政的な施設と彼らをつなぎ、同時に、学校制度の変化や自治体制度への展開に彼らを、後に筆者は、「運動的行為体」あるいは「共振的行為体」として考えていたのは「認識過程事例②」の「レストラン」の店主・経営者のT氏である（広田, 1997; 2003: 93-138）。その「レストラン」には、上記の担当者や小中高の担当する教員や、鶴見の「国際教室」でボランティア的に教育をした元教員、「ブラジル協会」で出会った、その当時公立高校に通っていた生徒らも、この場所で出会えた。ここでは、この場所でちょっとした「言葉の教室」も開かれ、その店主兼経営者の学校関連での支援を知り、仕事の後にこのレストランに寄ってくる人同士が仕事条件での相談等として交流する「場面」にも出会った。筆者は、鶴見U地区の他の学校同士の「連絡会」や沖縄出身者らの記憶（歴史）や「アソシエーション」に出会うことができたが、なぜ同氏が「共振的行為体」と「場所-形成」につながった理由のひとつとして、上記の店主兼経営者のある言説、それは、本人の記憶としての、東京に出てきた当時に勤めたあるバス会社での経験や記憶が、同地で行われた学校設立の活動経験に関する言説につながっていることを筆者は大分立ってから理解した。それらは、決して彼女にとっては「懐かしい思い出」ではないが、それは、いわば「共振性」を話す時に必ず「記憶」として出てくる言説や「物語」であった。同氏らの活動は、学校教員、町内会、自治体、運動家、研究者たちとの連携をもたらし、このU地区のアイデンティティの形成につながったと筆者は考える（広田, 2003）。同氏からの話のなかから筆者は、「旅行代理店」やその他地区（群馬O市やO町）での彼らの「結節点」（企業や「スーパー」等々）の状況を知ることが出来、そうした話とおして、大泉でのT氏の「囲み図」の「ある行為体への認識過程事例③」と、そして後に、「認識過程事例⑤」としての人びとに出会うことになる。筆者は、フィールドワークのなかで印象深い言説や偶発的な出来事に出会

い、エスノグラフィにとってはそれがひとつの言説やある現実を語っていることに気付くことについても説明しておきたい。前述のように「異質性認識」は、まさに「互いの経験や記憶を相手のなかに見つけ、その相手の経験や記憶を、自分のなかに見つける相互作用と節合的行為」を表わすと考えるが（広田, 1997; 2003: 7; 広田・藤原, 2016: 34）、そうした「異質性認識」の瞬間の出会いや親和性をとおしても出現する。実際、ここでの彼らの「異質性認識」やそれにもとづく（軋轢も含めて）節合は、彼の活動の「日常実践」や偶発的にも出現し、筆者はそれを「エスノグラフィック・モデル」では、「創発的節合」という言葉で表したい。

第三に筆者は、「結節点」での「行為体のありかた」や「異質性認識」と「創発的節合」とが出現する「場面」は、上述のさまざまな「場所」で出会った「個人」の繋がりを辿ることで、研究上の理論に「洞察」を与える機会に出会えることも述べておきたい。それは鶴見からの繋がりを辿るなかで、群馬県O町での「個人（行為体）」やいくつかの「場面」に出会った。群馬県O町の「移民／越境」の人々の存在は、詳しく報告しているが（広田, 2004: 253-267; 広田・藤原, 2016: 117-160）、この町で、家族経営で、「日系人支援的センター」を営んでいるT.S氏（「囲み図」での「認識過程事例③」）は、1990年前後にO町に「帰還移民」として定住し、「書類代書」や「旅行代理店」の支援などを行い、「ブラジル人学校」の経営もした。その夫であるT氏は当時、日系人向けの「派遣業」をしていたが、T.S氏は、同地にいた「日系人ブラジル人」「帰還移民」同士で、そのなかに多くの店舗があるいわゆる「デパート兼出会いのセンター」でもあった「ブラリアン・プラザ」（当時）建設運動を支援し（上毛新聞, 1988）、そのほか自身の経営するいわゆる「外国人学校」の経営のかたわら、同町自治体の委員会の「場面」にも積極的に参加し、そのなかで「移動／越境者」の存在を、その地域の他の諸個人に繋ぐための役割を担った。その「個人（行為体）」としての彼女の特徴は、彼女自身は、幼児のころに家族と共にブラジルに移住し30年以上を経て日本人国籍の「帰還移民」としてこの地に移動した。しかし、このT.S氏の「立ち位置」は日系ブラジル人としての「異質性」を担いながら、その地域での自治体の外国籍住民への受け入れの政治方針の「浮き沈み」のなかで、その多様な活動を背景に、「移民／越境者」を繋ぐ役割を担った。同氏のその「行為体」としてのその形は、筆者からすれば、「限定された地域だけ現れるものという

よりは、より大きなスケールのなかで構成されたものとしての関係が集う状況「問題意識の転換点」(広田・藤原, 2016:38)での「場所」を起点に、ある時は日本人としての「帰還移民」として「活動家/交渉者」として、そして時には「移民/越境」としての「異質性認識」を担った「行為体」として、「企業体ブラジリアン・プラザ」の設立や、同町の自治体企画の「ブラジル人祭り」の形成や「多国籍タウン」の形成のための「創発的節合」の「日常実践」を、「移動/越境者」と「共振者」の側面からする、いわば、「異質性を担って活動する行為体」および「創発的コミュニティ形成の行為体」として活動をした、と筆者は考えている。彼女の「行為体」としての活動は、ブラジル人の構造化された一般的なエンクレープでの「ミドルマン・マイノリティ」といった表現だけではその存在を表現することはできない存在として、その自治体やその町での地元の商工会を中心とした活動や選挙時の政治的な役割や、町のコミュニティに対して、まさに「創発的節合のコミュニティ」生成の役割を果たしていた。

第四に筆者は、東京新宿の、通称「コリアタウン」(現在は国際タウン)のなかにある「イスラム・スポット」でのインド出身者の「ある起業家N氏」は、(本稿での「囲み図」での「行為体への認識過程事例⑤」として掲載している)そのN氏は、典型的な「場所-形成の行為体」としての役割を果たした人として筆者は記した。それは、筆者が言う「場所-形成」が、それが記憶であれ表象的であれ(広田, 2016:39)、既成の「場所-形成」の空間のなかに、自らの「ハラルフード店」その他の起業の活動を土台に、「モスク」や、そのほかの「ハラルフード店」やレストランや、本来、日系ブラジル人のための送金業(本来は日系人用に企業したが、東南アジア系の「移動/越境者」の「送金業オフィス」としてここに開業した)も含めて、そこに、「モスク」「聖なる結節点」とした「場所-形成」という新たな「オーセンティシティ」を「場所-形成の行為体」としたのである。「場所」への新たな「オーセンティシティ」の形成は、まさに、従来のそれとは「異なる空間」を既成の制度の場所に形成した(広田, 2016)。この「異なる空間」の形成は、いってみれば、従来からの「オーセンティシティ」(Zukin, 2010=2013:4 etc)すなわち、従来には閑静な「文化的な町」であった「B-通り」に(広田, 2016:185-189)、もう一つの「オーセンティシティ」を創り出す結果を果たした。筆者の、既成の商店会長へのインタビューからも分かるように、そこには軌

轍があった。しかし少なくとも彼の行為は、「場所-形成の行為体」あるいは「オーセンティシティを変容する行為体」としての「創発的」な「場所形成」の役割を都市変容のひとつの動因としての役割を果たしたと筆者は考える。それはまた、それを認識しない他者にとっては表象的な空間——たとえば上記のその送金業オフィスなどは、ビルのなかにあるが、過去にフィールドワークをした人々には自明の企業である——を都市に作っている。そしてこの「場所-形成」の獲得と「イスラム・スポット」として新たに表象化し出現するこの「オーセンティシティ」は、筆者の「エスノグラフィック」な調査のなかでは、「初期トランスナショナリズム」に関する文献を出発点として、山口県S.O島の属島のO島からハワイに移動した人びと(「囲み図1」の「行為体への認識過程事例④」)も含む日本人の「移動/越境者」が戦前のホノルル市に創り出した「商店会ア・アラ街」の「記憶」事例にも見える(広田・藤原, 2016)。それを「オーセンティシティ」の変化としてみれば、それは、都市形成を分析する場合の、ひとつの「エスノグラフィック」的理解のひとつでもある(五十嵐, 2019; cf. 阪口, 2022)²⁾。ちなみに、新宿でのそのエスノグラフィックな調査は、「モスク」を設立したN氏との10年をへて再会のなかで、偶発的にふいに出現する言説「この場所は聖なる場所である」や、「既存の制度的地域の商店会長」へのインタビュー等々によって、改めて、この場所に多くの彼らのオフィスや宗教施設や金曜日だけの礼拝を含む「人びとの集合」を、「イスラム・スポット」という名の、新たな「オーセンティシティ」の変化に結び付けた例である。

第五に筆者は、最後に、N.Y.でのE地区で、これもディアスポラ的な移動経験者の企業経営者を父として、自身は、アメリカで生まれアメリカ国籍をもち有名大学を卒業し、同地から上昇移動はせず、自身の記憶としての「日本人性」をアイデンティシティの拠り所として、同地区で経営者としてトランスナショナルに、「創発的コミュニティ」の成立に自身の「生きかた」の重要性を重ねようとする「個人(行為体)」にも出会った(「囲み図」での「行為体への認識過程事例⑥」)。類型化が目的ではないが、前者の人とは「記憶の異質性を担いながら創発的コミュニティの生成を目指す行為体」である。「異質性認識」に支えられた「共振」や「創発的節合」を、「行為体」の言説や表象や事例や、現在進行中の「日常実践」の偶発的な「局面」にも、そして同時に、既成の制度や構造や文化や政治経済的構造との「創

発的節合」の過程に探り、そのなかからどのような「行為体」が生まれてくるのか、その「生き方」の意味やその繋がり「創発性」やコミュニティの位置を探り、それを既成の制度や構造との「創発的なつながり」につなぐ行為を、エスノグラフィック的に参与し、言説や事例として提出することこそ、筆者の「都市エスニシティ論」の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の重要な「場面」「局面」を見る理由でもある。

「異質性認識」を中心に繋ぎ、そこに現れた概念、たとえば「場所-形成」に関わる「局面」や、それについての感情や記憶（歴史性）を描きつつ、それがどのような「行為体」なのかを、「語りの説得力の言説と事例」に依拠しつつ、それを上記の「限定された地域にだけあらわれるというよりはより大きなスケールのなかで構成されたものとして考えられる関係が集う状況としての」「行為体」と「場所-形成」として考える（Smith, 2001: 107; 広田, 2016: 38）。「場面」や「局面」、表象や偶発性や記憶も含めて多元的な叙述を重ね推敲することこそ、筆者の「都市エスニシティ論」の研究の、エスノグラフィックの調査の場面の繋がりととなる。

3.2 中間的な総括——生の調査的経験と理論的世界をエスノグラフィックに繋ぐ方法としての「多元的な叙述」の意味

筆者はここまで、筆者らの「都市エスニシティ論」の研究を説明するために「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」を述べてきた。筆者のエスノグラフィックな調査研究での手法、特に、「人から人へ」と「結節点」を繋ぐ方法は、「[調査の] 代表性は無作為抽出や層別化によって保証されるのではなく、開発されつつある理論に関して新しい洞察がどの程度期待できるか」という考えかたに基づいている（Flick, 1995=2002: 82）。筆者のエスノグラフィックな調査研究は、「個人」や「結節点」での、筆者にすれば「意味が展開された場所」を研究の「通路」として、そこでの出会った人びとを通じて言説や出来事や事例を繋げて、筆者の「洞察」を得ようとする方法であり手法であり、次の「結節点」からエスノグラフィックに観察しインタビューをし、時に偶発的にその言説や事例を繋いで、参与して、確かめる方法である。筆者のエスノグラフィックな調査は、前出のウヴェ・フリック風に言えば、「観察」や「半構造化インタビュー」の「ナラティブ・インタビュー」や「ライフ・ヒストリー法」や「エスノグラフィック・インタビュー」や「エピソード・インタビュー」そして「参与

観察」が混じり合っており（Flick, 1995=2002: 122-142 etc）、時間は、毎日のように会うこともあれば、何年かを掛けることもある。すでに述べたように、関連する言葉や記号や言説への「気付き」は（過去のフィールドワークの経験から）即座に生まれることもあるが、その時は気が付かなくとも何年か過ぎてから（再訪や再会のなかで）気付くこともある。それはまた別の「個人」との話しなかで気付くこともある。前述のように、筆者の「都市エスニシティ論」のエスノグラフィックにとって、「創発的節合」を生み出す「場所」や「場面」「局面」は、「行為体」や「共振者」や既成の制度や構造に属する「行為者」との「異質性認識」の相互作用の場である。この「異質性認識」の相互作用のなかから、「語り」の説得力ある言説や事例を担う「行為体」が現れると筆者は考えている。前述のように「結節点」の場での互いの立場や経験の交差や、アイデンティティや持っているこの「異質性」を認識するための「場所」や「場面」での言説や実際の節合のなかから、「行為体」としての「生き方」や「のりこえ」を表象する出来事や既成の構造との「創発的節合」を発見しようとしている。

こうした「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」として説明した方法の意味を中間総括風に述べれば次のようになる。「場所」を起点として、「語りの説得力ある言説や事例」の担う「行為体」としての「日常的実践の共振的行為体」や、そのライフ・ヒストリーを「移動/越境」の歴史への「批判」として述べた「物語を産出する行為体」や、群馬県〇町での「異質性を担う行為体」「節合を交渉する行為体」などは、構造機能分析的に、たとえば、「移動/越境」のエンクレーブにおける、「移動/越境」の出生地での階層に分類された位置（例えば、未熟練労働、専門技能、起業経営者）と「地域の受け入れの違い」とをクロスして出てくる「行為体」——たとえば、「ミドルマン・マイノリティ」や「エンクレーブ・エコノミー従事者」や「ゲッター・サービス者」等々といった類型化——に当てはまる「行為体」になる。しかし、構築主義的な考え方と同時に、エスノグラフィックな研究、すなわち、彼らの記憶や歴史性や「批判」が集う「場所」「場面」「局面」から得られる言説や出来事は、「個人（行為体）」の「生きかた」と大きな都市論を繋ぐ、さまざまなテーマを、都市社会学的に提起してくる（広田, 2004; 広田・藤原, 2016）。エスノグラフィックに、そしてその言説や事例のなかには、「創発的な出来事」や「表象」「記憶」等を含めて「語る」ための「多元的に叙述」することこそ、（無論構

造機能分析だけではなく)今の都市社会学にとって必要な方法、理論であると考え。筆者からすれば、「都市エスニシティ論」を説明するための「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」からでも、「場所の転換」された「場所」や「場所形成」を起点に、彼らの主体性や既存の制度や構造との節合を将来に向けて描くことの可能性が現れてくる。既に述べた「オーセンシティ」をめぐる「創発的節合」の「エスノグラフィック」の方法なども都市社会の空間形成につながるひとつの道筋であるし、それは、「都市コミュニティ」への研究の新たな角度を提起しているように思われる。

本稿で「エスノグラフィック・モデル」として表現した筆者の「都市エスニシティ論」は、前述のような、都市社会学のなかでの、「先行」する「都市コミュニティ論」や特に1995年以降の「コミュニティとエスニシティを主題化した」奥田道大の「都市コミュニティ論」の枠組みや方法論とどのように関連するのか、あるいは、どのような点が筆者の「都市エスニシティ論」——「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」——の特徴なのか。次に、上記の筆者の「都市エスニシティ論」の「モデル」を一層推敲するために、「先行」した「都市コミュニティ論」の意味や、筆者が現時点で考える「示唆される経験」や「差異」等々について整理しておきたい。

Ⅲ. 「都市エスニシティ論」と「都市コミュニティ論」 ——「示唆される経験」と差異をめぐって

前述のように、「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」として整理した筆者の「都市エスニシティ論」の社会的特徴は、「個人(行為体)」の「生きかた」と「場面」を組み合わせることで、「移動/越境」の時代の都市社会学そして都市コミュニティ論に、どのような「行為体」の出現可能性を提案できるかどうか、そして彼らの存在に支えられて、どのような(表象や瞬間的な可能性も含めて)「場所-形成」の出現を呈示できるかに、そのポイントがあった。そしてその過程の土台には、「移動/越境」の時代の「異質性認識」を基にした筆者の「立ち位置」があった。

そこでⅢでは、前述のように、[1]の[1.1]で、筆者の「都市エスニシティ論」に「先行」し、同時期に「コミュニティとエスニシティ論の主題化」とする奥田道大の都市コミュニティ論の理論的、方法論の「視線」や「立ち位置」が、「都市エスニシティ論」の源流と見

做されるか、あるいはどのような道を開く原点になったのか、そこから筆者がどのような「示唆される経験」を得たのかを考え、そして[1.2]では、その理論的、方法論のポイントである「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を探る具体的な方法や考え方について、わずかながらではあるが筆者もその一部として関わった調査票調査やフィールドワークへの奥田道大の洞察力や感応力に注目しつつ「示唆される経験」として考えてみたい。そして本章の[2]の[2.1]では、奥田道大の「モデル」の「立ち位置」が、「移民/越境」の時代において「連続と不連続」に直面したことを再考し、[2.2]では、筆者の「都市エスニシティ論」と「都市コミュニティ論」との差異も含めてまとめたい。ここからは、奥田道大の「都市コミュニティ論」が、外国人居住者問題やその後「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論に展開し、「都市エスニシティ論」に道を開きながら、最終的には、「微妙な距離感と境界を内在化させながらも住み合う実態」(奥田, 2009: 89)への「みきわめ」(奥田, 1983: iii)を「ふつうの都市コミュニティの様相」として描き(奥田, 2009: 132)、「コミュニティ・モデル」の(筆者からすれば理念的な)「都市共在感覚」(奥田, 2009: 144-145)に収斂したのかに関する筆者なりの考えを述べたい。

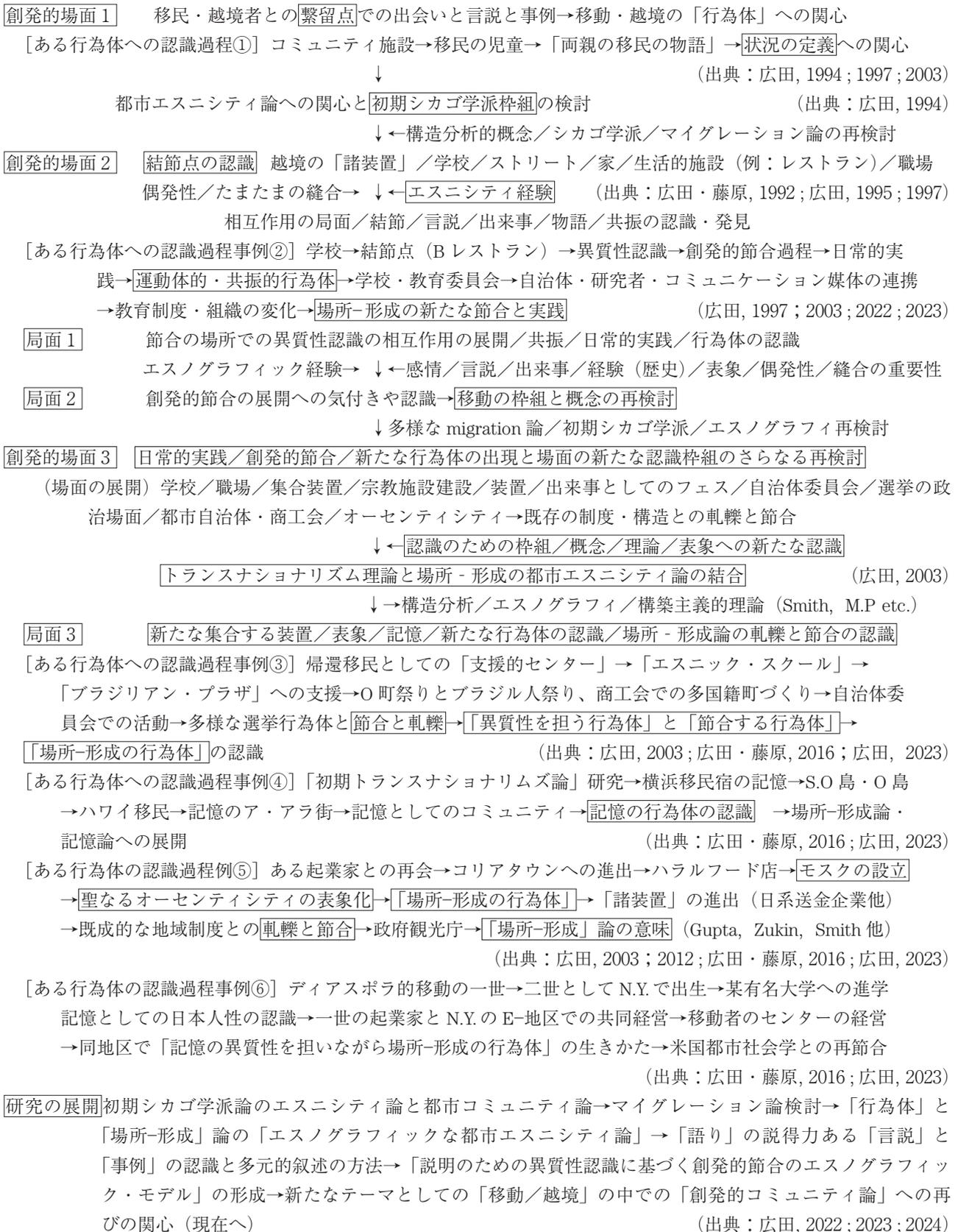
1. 奥田道大の「コミュニティ・モデル」の「複線的/伏線的視線」の立ち位置——「異質・多様性」の発見の意味とその「先行性」をめぐって

1.1 「コミュニティ・モデル」の規範性と「[理念から]こぼれおちるもの」との「臨界点を見きわめる」視線——「都市エスニシティ論」が「示唆される経験」として

奥田道大の都市コミュニティ論が、「都市エスニシティ論」に「先行」する理論的、方法論的な意味を理解するためには、筆者としては、都市コミュニティ論の研究の独特の「視線」と「立ち位置」を理解する必要があると考えている。それは、奥田道大の都市コミュニティ論が、前述のように、なぜ、都市エスニシティ論をその主題のひとつとして選んだのかという素朴な疑問を理論的そして方法論的に考える時の手掛かりにもなる。同時に筆者としては「都市エスニシティ論」の推敲のための「示唆される経験」を表わす点である。

奥田道大の「コミュニティ・モデル」の「研究の視線/立ち位置」自体は、中間層を起点とした「コミュニティ・モデル」から、「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論の時代をくぐり、最後

囲み図 1 「都市エスニシティ論」の「行為体」と「場所-形成」論への研究経緯
—「異質性認識にもとづく節合」のエスノグラフィック作業と理論化への過程—



* 出典については、1994～2016は初出のもの、2022～2024は広田による整理及び推敲論文での出典を指す。

の「コミュニティ・モデル」の普遍を「共在感覚」に求めるまで、時代の揺れのなかでも、維持されたと筆者は考えている。

奥田道大の都市コミュニティ論は、少なくとも理論テーマとしては、1960年代から1970年代にかけて、奥田道大自身の言葉を引用するなら、「社会構造の基底を支えていた既成秩序（自然村的秩序、共同体的秩序）解体に伴い……新しい秩序モデルの創造・再発見」（奥田, 1983: iii）を求めて、「新中間層型都市コミュニティ・モデル」の形成を起点として、その当時の「反-個我モデル」や「反-ムラ・モデル」あるいは、それとの「既成秩序の裏返しの新しい共同性・連帯性の軸立て」とは異なる、「新しい秩序モデルの創造・再発見」にある（奥田, 1983: iii）。

奥田道大の「都市コミュニティ論」の「コミュニティ・モデル」が、当時は、複数性というよりは、ひとつの「普遍性」を求めていたことも事実である。というのも、奥田道大自身が後に自らの「モデル」について、当時の他の研究者からの「[そのモデルは] 普遍のモデルとしての見通しがついていないのではないか」という多くのコメントを受けたことを思い出しながら、「もともと地域性と……普遍性……の座標軸の交差においてコミュニティの発想とモデル化を図った経緯からすれば、[その] コミュニティの事例が個別の話だということは、自己の矛盾をはらむ」と述べている（奥田, 2004: 191）。奥田道大の「コミュニティ・モデル」の認識論的枠組みは、「行動体系」における「主体性対客体性」の縦軸と、「価値意識」における「普遍的価値対特殊の価値」の横軸を交差させることで、現実の地域社会を見、そこに現れてくる四つの「モデル」として、①「伝統的地域共同体モデル」、②「アノミー型モデル」、③「個我型モデル」、そして④「コミュニティ・モデル」を析出し、分析した（奥田, 1983: 28）。

ただ、筆者の「都市エスニシティ論」のエスノグラフィックな立場からすると、奥田道大の「コミュニティ・モデル」の普遍性（や理念性）には、現場からの「リアリティ」に感応し洞察力ある調査感覚と、それらの現実を「複線的／伏線的」にみる奥田道大独自の「視線／立ち位置」、すなわち、その理念的な「モデル」ぎりぎりの「臨界点」にまでその有効性を見極めようとする「視線／立ち位置」によって、その「モデル」を支えたとともにその射程を拡げてきたところにその特徴があると筆者は考える。（[1.2] で具体的に示すように）現場での洞察力ある「複線的／伏線的な視線」と、その

普遍性（そして理念）へぎりぎりの「臨界点」に立つ「立ち位置」が、奥田道大の理念的モデルの真骨頂であると筆者は考える。そして、奥田道大の「複線的／伏線的視線」の「立ち位置」とその見極めの方法は、奥田道大自身が述べているように、「理念からこぼれ落ちるもの」を「異質・多様性」とし、その「[[理念から] 異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を探る地点ぎりぎりに立ってその「臨界点」を見極めようとするところに特徴があった（奥田, 1983: v）。それが奥田道大の「コミュニティ・モデル」の認識論的枠組みを、多様な領域との「臨界点」を超えて射程を拡げた原因であると筆者は考える。

この「理念からこぼれ落ちるもの」、そして「[[理念から] 異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を探って常に目を向ける「視線と立ち位置」こそが、筆者にすれば、特に今の現時点での筆者の「都市エスニシティ論」にとっての源流であり、そして、都市コミュニティ論が「都市エスニシティ論」に「先行」し、新たな道を開いた貢献であり、そして、その臨界点ぎりぎりの立ち位置は、筆者にとっては都市コミュニティ論から「示唆される経験」であると考えている。起点としての郊外における新中間層を基盤とする「コミュニティ・モデル」を、都市インナーエリアでの自治体との共同や、その後の「外国人居住者問題」をへて、その後の「コミュニティとエスニシティを主題として」の都市コミュニティ論（奥田, 2004: 185）は——奥田道大はその研究時期を「錯綜体都市・グラスルーツ版」の時代（奥田・鈴木, 2001；奥田, 2004: 196etc）あるいは「都市論」自体に注目しつつ「コミュニティ・フラグメンテーションの時代」等々と呼んだが（奥田, 2004: 200）——その「理念からこぼれおちるもの」「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を探る「視線と立ち位置」とその洞察力と感応力の調査方法は、奥田道大の都市コミュニティ論の「モデル」の基底にあるものであったと筆者は考えている。

この「理念からこぼれ落ちるもの」「異質・多様性」そして「[[理念からは] 異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」に、「複線的／伏線的視線」からの洞察力や感応力ある調査のしかたは、筆者だけではなく、多くの「都市エスニシティ論」研究者にとっても「示唆的な経験」として受け止めなければならないと筆者は考える。

1.2 再び「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を求める洞察力——奥田道大の調査票調査とインタビューの方法をめぐって

この「理念からこぼれ落ちるもの」を「異質・多様性」として「[理念からは] 異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」(奥田, 1983: v)を、「理念的」「普遍的モデル」の連続性と不連続との「臨界点」まで見極めようとするその視線は、当初は「いわゆるムラ・モデルとの距離のとりかた、連続と非連続の臨界点のみきわめあたりに、新しいモデル化への根拠をおいたが、その後、地域としては郊外から都市インナーエリアに、そして階層的、職業的、運動的、世代的に(「旧い」中間層だけではなく)その「臨界点」は広がっていく。たとえばそれは、「混住地での農業者と中間層との違い」のなかに(奥田, 1983: 92-110)、あるいは組織的にも「住民運動の能動性対順応性の違い」や(奥田, 1983: 87etc)、「作為阻止対作為要求との対立」のなかに(奥田, 1983: 158-159etc)、そして構造や文化・思想にかかわる「まちづくり」のなかでの、コミュニティの制度形成対住民の住むことの哲学の複線性へと広がっていく。それは、奥田道大が言う「大都市周辺部の郊外型Ⅰ、郊外型Ⅱの調査事例を辿りながら、中心部のインナーシティ型、都心型を射程とするコミュニティの複合類型型案」まで、つまり『『都市コミュニティの理論』(1983)の最終章』まで、「異なる立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を模索し(奥田, 1983: v)、「理念的」「普遍的モデル」の「連続性と不連続との『臨界点』を見極めようとする」方法が続いた(奥田, 2004: 177)。ちなみに、その「臨界点」には幾つもの揺らぎがあったが、奥田・田嶋編『池袋のアジア系外国人』(めこん, 1991)あたりをひとつの「大きな揺らぎ」あるいはその「臨界点」ではなかったかと筆者は思う。

ところで、奥田道大の「異なる立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を模索し(奥田, 1983: v)、理念的、普遍的な「モデル」の「連続性と不連続との『臨界点』を見極めよう」とするときの、現場での「リアリティ」に関する感応力や洞察力ある調査方法、「複線的／伏線の視線」に支えられた調査のしかたとは、具体的には、どのようなものであったか。それを考えることも筆者にとっては、「都市エスニシティ論」の「説明のためのモデル」でまとめた方法を「推敲」するために示唆される。

奥田道大の「理念からこぼれ落ちるもの」や「[理念

とは] 異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を見つける方法を支えた現実の「リアリティ」への調査のしかたや洞察や感覚を考えるためには、具体的に「なにげない感覚」にまで目をむけて考えることも必要かもしれない。というのも、奥田道大の都市コミュニティ論や「共生の作法」等を改めて「能動的」に捉えなおそうとする動向や(中筋, 2023)や、「地域における住民の価値意識と行動体系」の「相克」等の問題も含めて都市コミュニティ論に関する考察を見ると(平井・宮地, 2023; 宮地, 2023)³⁾、本稿での筆者の考察も何らか役立つかもしれない。

前述のように、奥田道大の、「リアリティ」への感応力や洞察力や「なにげない感覚」にまで推測する時、特に筆者にとっては、(1983年から1987年まで数回ではあるが)その調査に関わった奥田道大の「質的調査票調査」の感応力や洞察力ある調査のしかたについて、特に奥田道大の「自由回答事例」の「質的集計」作業やフィールドワークの作業を思い起こす。それは、「日本地域開発センター」を舞台にした奥田道大を含む「地域社会研究会」での幾つかの『報告書』がそれにあたると⁴⁾。無論、この時代の調査のしかたに目を向けたのには、前述のように動向もあるが、筆者としては「自由回答」を中心とした奥田道大の「質的調査票調査」と、筆者の「都市エスニシティ論」の「参与観察的」で「エスノグラフィック」な作業を重ねてその意味を考えてみたいこともある。

上述の[注4]で示したその『報告書』の中でも、(筆者にとっては参加できたもののなかでは)奥田道大の「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を多様に可能性を含めて試みたものとしては、東京都生活文化局『ニューサーティの生活と意識に関する報告書』(1985)およびその「質的集計」をまとめた『資料編』である日本地域開発センター編『ニューサーティの生活と意識(資料編)』(1986)、そして「フィールドワーク」を中心としつつ、そこに参加した行政担当職員の情報やアイデアや同センター「研究員」や参加者(筆者も含めて)総出で行った「ワンショット・サーベイ」的ではあるが「エピソード・インタビュー」を重ねて、産業的、人口的な統計や数値や「歴史的な「囲み」をかさね事例で構成された東京都板橋区編『いたばしコミュニティ白書'87 地域からのメッセージ』(1987)である。前者の『報告書』(東京都編, 1985; 地域開発センター, 1996)のなかでも特にその調査票調査は、当時まだ「コミュニティの主体」とまでは言えなかった「団塊の世

代」を対象にして、全体で39の「主設問」と、それに付随する、総計70以上の「補助的設問」(S.Q)から構成されたものである。そしてその全体の主要な設問のすべてが「自由回答方式」で構成されている。その「主設問」は、1.「回答者の育った時代に関する設問群」、2.「家庭生活に関する設問群」、3.「職場生活に関する設問群」、4.「地域での生活に関する設問群」、5.「都市生活に関する設問群」、6.「都政や行政への意見に関する設問」から構成されている。全体で約800部以上が「留置自記入」で配布され423部が回収された（日本地域開発センター編、1986：まえがき）。

エスノグラフィックな調査の今からすると、その調査票調査の特徴は、調査票の設問群の設定や「サンプリング」のしかた、そしてそれぞれの質問群の設定や「自由回答事例」の「アフター・コード設定」や分類、類型化、分析の仕方に関する「質的調査の規準」には、来るべき「団塊の世代」のコミュニティ居住者としての意識や活動の在り方への可能性も含めて総合的に理解しようとして「自由回答方式」を求め、その「アフター・コード」も、前述のように、まだ見えないものを探る可能性も含め幅広く得られることを目的にしている。そこで、その『資料編』（日本地域開発センター編、1986）の「まえがき」には、「集計者の側の責任で回答の文意を汲み、幾つかのカテゴリーに分類し、……それぞれの分類項目を典型的に示す具体的な回答例についても紙幅の許す限り掲載した」とある。ちなみに、その質的調査作業上、自由回答群の「集計」作業は、奥田道大とそれに参加した筆者が質的集計工程過程を担ったが、その「自由回答」に携わった筆者の現時点からの印象としては、この自由回答群によって構成される調査票調査の規準としては、今でいえば、「質的調査の規準」に沿っていたと思われる。つまり前述のようにそれは、まだ主役とは言えない「団塊の世代」の地域、都市生活を出来るだけ（可能性も含めて）総合的に知りたいという「理論的目標」、むしろそこには「理念モデル」からは異質・多様な「団塊の世代」との「異なるもの、見えないものと脈絡と基盤性」を求めるといふ奥田道大の「理論的目的」もあったとは思いますが、（筆者がⅡで述べたような引用が許されるなら）その当時の「理論にどの程度の洞察を期待できるか」という「質的調査規準」に近いものもあったのではないかと筆者は考えたい。もちろんこうした「質的規準」については調査者自身の独善性や偏見や常識といった問題もあるが、（後述するように）それを極力避けるための準備段階の作業が十分に行われていたの

ではないかと筆者は考えている。筆者としては、こうした規準を背景に、実際の自由回答の抽出、分類、類型化に参加した筆者としては、租の分類や類型化に関しては、あえて言えば、当時の「K.J法」をそれとなく意識しながら、「自由回答群」の「アフター・コード」をしたことを覚えている。したがって筆者からするなら、それは調査票調査でありながら、「自由回答群」の言葉のなかに入り込み、上記のような「質的規準」のもとに、前述の「まえがき」のなかにあるような態度で「集計者の側の責任で回答の文意を汲み、幾つかのカテゴリーに分類し、……それぞれの分類項目を典型的に示す具体的な回答例についても紙幅の許す限り掲載した」ということになる。もちろん、その「自由回答」の質的な事例の分類工程過程は、この調査の理論的意図をゆるやかに確認したのち、筆者による調査票全体の読み込み作業、「アフター・コード化」の過程としては、各質問群全体の意図を目的とする再読み込み作業によって言葉の意味を確認、各質問群における「自由回答事例」の抽出と類型化、各類型化の範疇の「臨界点」の見きわめ、各類型化に当てはまる「具体的回答事例」の推敲と書き出し、そして各質問群のそれぞれの「解説」の予定稿をつくり、全体報告の報告（案）を、奥田道大との確認過程をへて、研究会に報告するという順で進められた。もちろん、この『調査研究報告書』（東京都、1985）全体の「準備過程」としては、①調査委員会委員による討論、②関連する有識者からのヒアリング、③地域での座談会、④アンケート調査の実施、⑤各種資料、文献類の収集と分析の過程等々に関する文章があり、座談会については町田市、多摩市、墨田区、荒川区での座談会が設けられたことが記されている（東京都生活文化局編、1985：4）。

前述のように、筆者の「都市エスニシティ論」は「説明のためのエスノグラフィックなモデル」に示したように「人を介した人への繋がり」や「結節点から結節点の調査の繋がり」といった質的調査のサンプリングを進めていく際、理論に関して新しい洞察がどの程度期待できるかという規準は、エスノグラフィックの方法として、今でいえば「理論的サンプリング」という「質的規準」が実施されたのかもしれないと筆者は考える。当時の規準としては「示唆をうける経験」のひとつであったと考えている。ちなみに、当時の調査のアフター・コードに関しては、「自由回答事例群」の抽出や類型化に関しても、あまりリジッドに線引き化し過ぎないように、「臨界点」上にある「回答事例」を削除しないように意を凝

らし、その後の洞察ができるように、機械的な集計というより、集計者側らの「自由回答」の読み込みの余地に意をはらったことを思い出す。人間の手集計で行われたことの意味も考えてみることも必要だと思う。最も中心である「地域生活の質問群」に注目すれば、「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」に関する奥田道大の洞察は、筆者としては、同『同報告書』(1986)よりもむしろ、翌年続けて刊行された板橋区編『報告書』のなかに奥田道大が、「団塊の世代」の「具体的回答事例」を引用しつつ書いた文章に、その「団塊的な世代」への「なにげない洞察」や「脈絡と基盤性」との繋がり的一端が表現されていると筆者は思う。奥田道大は、「具体的回答例」として、たとえば、具体的な回答事例をみながら、たとえば「条件を整えば時間の許す限り子供の育成やスポーツ行事等に参加したい」「子供の成長に合わせて、PTAなど教育に役立つ活動に参加したい」「自分のできる範囲で適度に」「情報の場として地域に参加したい」「趣味を通じた付き合いをしたい」等々を挙げ、それを、次のようにまとめている。「地域の旧秩序の強いところでも、……『無関心』とレッテルをはられた彼らのなか」にもその「脈絡と基盤」への繋がりが「推測」できるとして、それを、「つなぎ、境界の世代の第一次ベビーブーム世代は、旧世代の地域間からすれば『軽薄短小』にうつるかもしれない。しかし大義名分にとらわれず、それぞれの生活関心、利益に応じて、地域との波長のあったところで行動に移す」と述べている(板橋区、1987:161)。筆者は、いわば奥田道大の調査票調査によるその「自由回答」への言葉の「なにげない表現」のなかにその「脈絡」を見つける洞察力を感じる。

もうひとつの例として、同上の東京都板橋区編『いたばしコミュニティ白書'87 地域からのメッセージ』(1987)も挙げておきたい。その『報告書』は、全体が180頁の満たない『報告書』であるが、全体の特徴は、参加した研究者や担当職員、「日本地域センター研究員」、編集者担当者らが、研究会をへて「異なるもの、見えないものとの脈絡と基盤性」を求めて、独自にあるいは数名で「現場」を歩き、それぞれの「地域」で出会った「もの、ひと、こと」の「事例」を、観察、「エピソード・インタビュー」「ナラティブ・インタビュー」を中心に、そこに人口や歴史やさまざまな「統計数値」を配置し構成した。

筆者にとって印象的なことは、板橋区「担当職員」からの情報にも補われ、前述の「異なるもの、見えない

ものとの脈絡と基盤性」を、地域としては、伝統的な町内会、高級居住地、あるいは産業地帯(町工場)の新たな展開や、農業者で「通勤農業」といった形態で維持している人びと、そして当時注目し始めた「外国人居住者」とのインタビューや、(当時通称された)「外国人専用アパート」や、福祉、メディアの出来事等々で、「もの、ひと、こと」(奥田の表現)の事例を求めた点に当てられたことである。ちなみに筆者は、伝統的な町内会にある、今は別の地域に住んでいるさまざまな人びとによる「ネットワーク」や、「外国人居住者」を担当したが、それ以外にも、二人、三人と組んで町工場や農業者のインタビューを行った。以上のような「異なるもの、見えないものとの脈絡」を探る「臨界点」の延長上に奥田道大が「都市インナーシティでの外国人居住問題」に的を当てる現実的な理由のひとつがあった、と筆者は考える。

ただ、今筆者のように「都市エスニシティ論」で「越境する人びと」の「生き方」や「行為体」のありかた、そしてそれを「異質性認識」にもとづく「創発的節合」と「場所-形成」論からするならば、既成の理念的な「コミュニティ・モデル」に立って、そこから「こぼれおちるもの」を探するという奥田道大の「立ち位置」と筆者の立ち位置は異なるが、少なくともこの時点での都市コミュニティ論の枠組み、視線、「立ち位置」はまだ「移動/越境」に突入する寸前ではあったが、「異なるもの、見えないものとの脈絡」を求め、その洞察を深め、前述の、理論的にどの程度の洞察力があるかを規準とする調査の考え方の発想のしかたはその後の「都市エスニシティ論」にとっても「示唆される経験」である。本節では、筆者の「都市エスニシティ論」の「説明のためのエスノラフィック・モデル」に関連して、構造機能分析からの角度からとは微妙に異なる「ひと」の見つけ方や住民とのありかたにつながる奥田道大の「複線的/伏線的視点」やその「立ち位置」からの「[理念とは]異質なもの、見えないものとの脈絡と基盤」を見つける方法について、具体的な「なにげない洞察」や方法の理論的規準の特徴について述べてきた。

ただ、筆者の「都市エスニシティ論」での「場面」や「場所-形成」での「異質性認識」にもとづく「行為体」、それに必要な表象や偶発性を含めた「創発的節合」との異同については、特に、「移動/越境」の時代の、互いに異なる「共有価値」同士の「異質性認識」に基づく「創発的節合」においては、受け入れ側での「コミュニティ・モデル」の「共有価値」自体が問題となる時代

になりつつあることも、同時に挙げておきたい。

2. 都市コミュニティ論のアーバン・エスノグラフィと「都市エスニシティ論」の「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」

2.1 「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」の出現と位置

奥田道大の「コミュニティ・モデル」の「理念からこぼれおちるもの」や「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」への「複線的／伏線の視線」あるいは、連続と不連続の臨界点を見きわめる方法は、「移動／越境」の社会的脈絡のなかでは、どのような課題に直面したか。筆者は、奥田道大の異なる文化的立場や階層の人々との「脈絡や基盤を求める方法」や「複線的／伏線の視線」とその「立ち位置」は、「コミュニティとエスニシティの主題とする」都市コミュニティ論の時代をへて、最後に都市コミュニティの普遍である「共在感覚」にいたるまでその理念は変わらずに続いたと考える。

しかし、後に述べるが、この初発の「コミュニティ・モデル」と「移動／越境」の時代の「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論での「都市コミュニティの枠組み」（奥田, 2004: 195）に関する「連続／不連続」については、前述のように奥田道大も懐疑的な課題を抱いていた（奥田, 2002: 195）。

「コミュニティとエスニシティとの主題における」都市コミュニティ論（錯綜体都市・グラスルーツ版）時代に入って、奥田道大の「異質なものの、見えないものとの脈絡」への「視線」は、「社会的には、社会的共有価値（social shared value）とか共有規範の用語に翻訳された「地平」に立って、そこから『社会的主体の形成』や『異質なものの相互を取り結んでいる同質の絆』（奥田, 1983: 303）を見つけるという「立ち位置」は変わらなかったと筆者は考える。ただ、「移動／越境」の時代においては、互いの移動者同士、あるいは移動者の「場所」でのそれぞれ異なる人びとや制度との「異質性認識」に基づく新たな「創発的節合」の出現は、どのような新たな「社会的共有規範」を探すことじたいに移ってきた、というのが筆者の考えである。少なくとも「都市エスニシティ論」の「場所」「場面」では、「既存の社会的共有価値」それ自体が議論にされていた。「移動／越境」の人びと（と「共振」する人びとや彼らと節合する制度や構造）との新たな「社会的共有規範」を、どのように「創発的」に現場やフィールドから見つけるか

が、まさに「都市エスニシティ論」の一つになった。実際、都市社会学のなかに、「[理念から] 異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」をどのように「普遍的モデル」のなかに文脈を見つけるか、という問題は、前述のように、「先行」の貢献であるが、ここで課題となったのは、「異質・多様性」の意味や研究の「立ち位置」それじたいが問題になってきた。そして、特に都市コミュニティ論が対象とした初発な「モデル」は、「移動／越境」の時代のなかでどのように連続性があり、どのように不連続なのか、「個人（行為体）」の「生き方」に焦点を向けた「都市エスニシティ論」の、「異質性認識」を節合したところに出現する「創発的節合」の在り方とはどのように異なるか、が問題になる。

無論、前述のように、こうした問題は1990年の「出入国管理改正法」以降の、1991-1993年ごろの「移動／越境」の「外国人居住者問題」の時期に「出現」した（奥田・田嶋編, 1991）。それは、「移動／越境」の進行のなかで「都市エスニシティ論」の「理論的世界」に注目していた田嶋淳子らの「国際的移動研究」での研究経験や、そして同時期、すでに鶴見で「移動／越境」の「個人（行為体）」に焦点をあてその「生きかた」と「のりこえ」の「越境者-エスニシティ」の「エスニック経験」（広田）等々をとおして、奥田道大の「コミュニティ・モデル」のなかにも、これまでとは異なる「方法論」の模索が出現した。

都市コミュニティ論が「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論に舵を切ったのは、『外国人居住者と日本の地域社会』（奥田・広田・田嶋編, 1994）と翌年の『21世紀の都市社会学 エスニシティと都市』（奥田編, 1995）であったと筆者は考える。それは、奥田道大の「コミュニティ・モデル」の理論的世界や普遍的な世界に「リアリティ」を「補足」というよりは、都市エスニシティ論に関わったそれぞれの研究者の「現場」からの独自の研究に沿ったものであったと思われる。この時期以降、奥田道大の「コミュニティ・モデル」は「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論は、「コミュニティ・モデル」から「こぼれおちるもの」[[理念から] 異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」というよりは、文化的にも民族的にも異なる「社会的共有価値」を持つ諸個人が相互作用し、節合する「境界点」や「臨界点」を見つけることが問題になったと筆者は考える。

前述のように、「コミュニティ・モデル」の普遍的な世界は、前述のような、従前の「コミュニティ・モデル」との連続線上にあるのか、それとも不連続なのか、ということが問題になったのはこのような状況のもとであった（奥田, 2004: 195）。文化的に同じ「社会的共有価値」を前提にしたこれまでの「モデル」の「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を求める研究行為と、「移動／越境」する「都市エスニシティ」の言説や事例の理論的世界と連続線上にあるのか不連続線上にあるのかについて奥田道大自身は、一応「連続論」に立ってこの「主題」を進んだ（奥田, 2004: 195）。それは、奥田道大のこれまでの独特の「コミュニティ・モデル」に底流する「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を見つけ、普遍的な「モデル」を求める研究を、「より大きな普遍的な都市コミュニティの枠組み」のなかで展開する方向性であったと筆者は思う（奥田, 2004: 195）。奥田道大は、そのあたりの問題を正しく、次のように記している。「都市コミュニティの再定義が、これまでの日本都市社会学のコミュニティ論の蓄積の連続性に位置するのか、あるいは断絶上に位置するのかは、にわかには断定しにくい。筆者はとりあえず、『連続説』に依拠しながらも、コミュニティの背景をなす地域社会の実態の見通しを越えた変容過程のなかで、結果として『断絶説』にくみすることも予期される」と現実を指摘している（奥田, 2004: 195）。しかしここでは、「[理念的から] こぼれ落ちるもの」や「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を、「理念的、普遍的なコミュニティ・モデル」の「社会的共有価値」を、これまでの規範的「コミュニティ・モデル」に包摂することはますます難しくなったと思われる。ただ、ここでも次の論点はきわめて貴重である。すなわち、都市論として奥田道大から提出された理論としては、「大都市市街地のなかの『町』の21世紀の類型 [である] 『エスニシティーズ・タウン』がその様相を見通しできるのではないか」という「理論的」発想と（奥田, 2004: 196）、方法論としては「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論（すなわち「錯綜体都市・グラスルーツ版」）での「アーバン・エスノグラフィ」（奥田同大の表現）の提示であった。後者の方法論は、従来からの調査票調査を、さらに「厚みのある調査票をもったインタビュー」を重ねて、その意味を推敲しようとする、いわばエスノグラフィックな方法論での「多元的な叙述」と「エラボレーション」——それは、「繊細な細部にまで感

応性をとぎすまして推敲を重ねつつ綿密な仕上げをする」方法（奥田, 2004: 207）——である。

この時期を振り返って奥田道大は、拙著の横浜市鶴見での「都市エスニシティ論」に、次のように示唆、課題を提示している。すなわち、「[都市エスニシティは] 少なくとも当該社会のなかでは、その支配的な文化や民族とは異なる人々とならざるを得ない。その意味で彼らはエスニシティであるが、だが、彼らはそうした立場を更に越えて、彼ら特有の世界を形成する。（広田）は、彼らを『越境者-エスニシティ』としてとらえ、彼らの『個人』としての側面に焦点をあわせて、そのなかから彼らの形成する世界の意味と、そこから導かれてくる研究者の認識の変容について考えてみたい、と言及している」と記した（奥田, 2004: 187-188）。そしてここでは、「(下からの) トランスナショナリズム論」にもとづいた拙著での「開かれた回路的世界」を、「拡がりと重層性ある大都市インナーシティ等に装置されている」（奥田, 2004: 188）として、その「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を求める研究のひとつの事例として挙げた。

筆者にとっては、これが奥田道大からの示唆、課題に当てはまるかどうかはわからないが、前述の「都市エスニシティ論」を説明するための「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」は、構築主義の考え方に支えられながらエスノグラフィックな研究に、「場所-形成」に関する概念の理論的転換や、「場面」や「局面」に関する注視や偶発性や「たまたまの縫合」や表象も含めて、この「移民／越境」のなかでの「行為体」の在り方を探し、それを、「より大きなスケールのなかで構成された、関係が集う場所」と「行為体」の存在のなかで考える方法を考えることを（広田, 2016: 38）、そして彼らの節合や「共振」や「日常の実践」や、既存の「行為体」との「創発的節合」に関する具体的な「エスノグラフィック・モデル」の前提として前述の奥田道大からの示唆や課題への回答のひとつとして、今後経験として提起する発想として考えている。

2.2 「都市エスニシティ論」の「モデル」の特徴と方向性 ——新たな「創発的都市コミュニティ」の意味

奥田道大からの課題、すなわち、「『個人』としての側面に焦点を合わせて、そのなかから彼らの形成する世界の意味と、そこから導かれてくる研究者の側の認識の変容」（奥田, 2004: 188）という問題に関しては、「都市エスニシティ論」を説明するための「創発的節合のエスノ

グラフィック・モデル」の呈示のかたちで、奥田道大からの経験や「都市エスニシティ論」の理論や方法への筆者なりのひとつの答えをだした。奥田道大の、「より大きな都市コミュニティの枠組み」(奥田, 2004: 196)に関しては、むしろ筆者は、「場所-形成」論での「行為体」の発見と存在のなかに、社会に対する「批判」を考える方向性を考えている。「都市コミュニティ論」の基本的な方法に関しては、説明のためのものではあるが「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」として一応の答えを提出した。奥田道大の「アーバン・エスノグラフィ」は、E・サイド (E. Said) の言葉を引用して (Said, 1991=1995)、「多元的な叙述」と「エラボレーション」をアーバン・エスノグラフィの方法論とすることの提案であった (奥田, 2004: 206-207)。この方法論の提案は「都市エスニシティ論」にとっても、前述の「行為体-志向の都市社会学」(Smith, 2001)の問題と同様、きわめて重要な指摘であると筆者は考えている。そこで、もしも「都市コミュニティ論」との関連で言えば、「異質の立場にあるもの、見えない存在との共通の脈絡と基盤性」を求めて「理念からこぼれ落ちるもの」「異質・多様性」「規範的モデルの持つ支配性」とのあいだの「連続と非連続の臨界点のみきわめ」という「先行性」は、「変容する都市コミュニティの普遍」(奥田, 2009)として解消するのではなく、筆者としては「場所」「場面」において、「行為体」が持つ記憶や表象(そこにはこれまでの経験の積み重ねに支えられている)、そしてその「場面」や「局面」に起きる偶発性や「たまたまの縫合」も含めて、「都市エスニシティ論」が、都市社会学に呈示する現在の方法として提示したい。それは、理念的で普遍的な「モデル」というよりは、現実の「移動/越境」のなかで、国境を越える「個人の生き方」を中心とするひとつの「事例」として、そして方法としてはしかし重要な「都市エスニシティ論」の時間と手間のかかる推敲の研究として選びたい。

この節の最後に、奥田道大の「都市コミュニティ論」の経緯に照らしながら、筆者の「都市エスニシティ論」を説明するための「創発的節合のエスノグラフィック・モデル」から見た筆者の「都市エスニシティ論」と「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論との特徴と方向性の違いを簡潔に示しておきたい。

1. 「コミュニティとエスニシティを主題とする都市コミュニティ論」は、普遍性の「モデル」のなかで、調査

を基に形成された「主体的行動と普遍的価値を組み合わせた枠組み」に基づき、その枠組みから「こぼれ落ちるもの」を、「異質・多様性」として捉える方法であるが、「都市エスニシティ論」は、移動を前提とした、互いに「異質性認識」を土台に作られる相互作用の「創発的節合」のなかで、互いに接触し交差する「個人(行為体)」の意味を考える「創発的節合」の世界の「モデル」である。

2. 「モデル」の焦点は、前者の「モデル」が、「もの、ひと、ことの関係性にもとづいて「[理念から]異質で、見えないものとの脈絡やその基盤性」を、特に集団組織やネットワークに焦点をあてて考えるが、後者の「都市エスニシティ論」は、「個人(行為体)」のなかに、彼らの記憶や記号や表象や偶発性や「たまたまの縫合」といった「創発性」の「場所-形成」や「場面」「局面」を置くことで、一方的な構造的規定性にクッションを置く。

3. 「異質・多様性」は、前者のそれは、「ある一定の社会の構造の枠組みが、異なる要素とどのように脈絡を「見きわめ」、どのネットワークを形成できるかに焦点をあわせるが、後者の「都市エスニシティ論」は、トランスナショナルな時代の、互いに異なる移動者同士の「創発的節合」に焦点を合わせる。

4. 方法(論)は、ともに「エスノグラフィックな調査」を基礎にするが、前者は、おもに「自由回答」を主体とした調査票調査の文字データと口述のインタビュー調査法であるが、ただその分析の方法として、現在の概念で言えば、理論にもとづく「サンプリング」をいれた手法と、参与観察や「エスノグラフィ・インタビュー」や「エピソード・インタビュー」の手法を交差させた方法をもつ。後者の「都市エスニシティ論」は、記憶や表象や偶発性等の局面に意識的に眼を向けるために、「語りの説得力のある言説と事例」を見つけるための理論的規準にもとづいた「観察」「エスノグラフィ・インタビュー」や「エピソード・インタビュー」の方法に、時間をかけた「参与観察」を重ねて、「多元的な叙述」を重ねる。それは、前者の「都市コミュニティ論」あるいは「都市モノグラフィ」が、工夫を重ねてきた「エスノグラフィ」の「多元的な叙述」を基礎とする。ただし、都市コミュニティ論が持つ洞察は、「囲み図」で示したような手続きにそって、感応的で推敲的な行為を重視す

ることは同じである。

5. 構造への接近については、前者は、同じ社会の構造のなかでの、「住民運動」「まちづくり」研究や「行政」との「都市計画」とのプロセス、そして郊外からインナーエリアでの「外国人居住者問題」とおして、構造機能的分析も含めた分厚い分析を積み重ねてきたが、後者の筆者の「都市エスニシティ論」では、まだまだそれは「課題」である。ただ、異なる「行為体」の「創発的節合」にもとづく構造を見るために、必ずしも構造機能的分析では見えない「個人（行為体）」の姿に目を向けることは可能である。たとえば、筆者の出发点であった鶴見では、「物語を産出する行為体」と「共振的行為体」のような「異質性認識」と「共振」に基づく創発的節合を分析することにが出来た。そしてその後の群馬0町の研究以降において、ポルテスらが言う「ゲッター・サービス」での「ミドルマン・マイノリティ」(Portes, 1989; 620)と呼んだものとは異なる角度から、「派遣業」者やいわゆる「エスニック・スクール」の運営を基礎にした「行為体」の行政委員会への参加や、選挙への圧力を持った「交渉型行為体」や「異質性を担った行為体」の既存的「構造」への関与に至るところに来ている。また、「場所-形成」をとおした空間形成への都市の構造変化は、たとえば新宿での「I-スポット」でのハラル経営する起業家による「モスク」の設立等にもとづく「場所-形成」での空間の変容あるいは「オーセンティシティ」による都市の空間変容のところまでは行きついた。地域での既存の制度との軋轢や節合の過程はその道筋を歩いて行ける予想はある。そしてニューヨークでのイースト・ビレッジでは、「一世」の起業家の「TIC」という日本人にとってのボランティア組織や、その「二世」による「エスニシティを担う行為体」としての、「場所-形成」やエスノグラフィックな関与を見る方法をとる。

6. 最後に、「都市エスニシティ論」からの都市コミュニティ論への貢献もある。前者も後者も、その構造との関連は、構造もしくは構造機能的に「規定された行為体」というよりは、前者は、どちらかという「中範囲の理論」からの接近へも目を向けながらその普遍性を求めるが、後者の場合は、「行為体」の「異質性認識」に基づくその繋がり「創発性」に目を向けてきた。それは、構造論からの拘束的規定性を避け、見えない、あるいは瞬間に目を向ける点で社会学的な貢献のひとつであ

ると考える。

IV. 終りに——ひとつの展望

「移動／越境」する時代の都市コミュニティ論においては、どちらかの「共有価値」の世界に「立ち位置」を据えて普遍を論じる時代ではないと考える。その方法が構造機能分析であれ、構築主義に支えられたエスノグラフィックな方法であれ、あるいは調査票調査であれエスノグラフィを中心としたフィールドワークであれ、奥田道大のなかにもあったように、感応力をもって幾度も推敲し、「多元的な叙述」を重ねていくしかない。普遍は、常に現場でのフィールドワークに支えられた推敲と「批判」でなければならない。「都市エスニシティ論」に立つ筆者としては、異質性や境界を「普通のこと」として目を逸らせることなく、「異質性認識」を土台にしつつ「相手の異質性に自分を見、自分のなかに異質性を見る」方法にもとづく「創発的節合」や「行為体」の在り方や都市の「場所-形成」の変容を、幾度も重ねる研究者のフィールド経験を土台に、表象や偶発性も含め、「臨界点」まで見きわめる姿勢が、今、必要であると改めて感じている。

注

- 1) 本編著は、奥田道大・田嶋淳子『池袋のアジア系外国人』（めこん、1991年）に比べると、そのタイトルには「外国人居住者」という言葉が冠されているが、田嶋淳子や文貞実や藤原法子や広田康生ら各投稿論文の内容は「外国人居住者論」というよりは本格的に「コミュニティとエスニシティを主題とする都市コミュニティ論」（＝エスニシティ論）に近い展開を示していた。奥田道大の本書での「異質・多様性」の対象には明らかにエスニシティが対象にされていたと筆者は考える。その意味では、「インナーシティ・コミュニティの外国人居住者問題」と「コミュニティとエスニシティを主題とする」都市コミュニティ論との分水嶺にあったと思われる。
- 2) ここでの表象性や「オーセンティシティ」という言葉については、たとえば「イスラム・スポット」でのそれは、これまでの筆者のフィールドワークでの宗教施設を作った人に関する話や礼拝やハラルフードの買い物、既存の商店会でのインタビューについても、さらに「移動装置」である送金業についてもそこでのインタビューをもとに記述したものである。そのインタビューは過去に別の場所（大田区）にあった時にも何度かインタビューを実施し現地で参与し、そして再び同地で実施したフィールド経験をもとに「オーセンティシティ」の変容として表現したもので単なる想像ではない。
- 3) 本稿で挙げた奥田道大を中心とした「地域社会研究会」

での研究については、「日本都市社会学会」（第41回大会、2023年、於関西大学）での「自由報告部会Ⅲ」で、平井太郎氏（弘前大学）と宮地俊介氏（東京大学大学院）両氏の報告「奥田道大をめぐるミッシング・リンク」がある。報告の意図は、もちろん筆者の「都市エスニシティ論」のさまざまな「行為体」の問題にも関わるが、本稿の趣旨は、奥田道大の「複線的／伏線的な視線」と「立ち位置」を支える方法のしかたに焦点を当て、そこから「示唆された経験」としてどのように考えることができるかに焦点をあててまとめている。

- 4) 筆者の、奥田道大「地域社会研究会」での「調査研究」については、立教大学の大学院応用社会学研究科修士課程を修了後の奥田・広田共編訳『都市社会学のために』（多賀出版、1983）の刊行後、日本地域開発センター編『高齢化社会の市民』（1983）、続いて、東京都生活文化局『ニューサーティの生活と意識に関する報告書』（1985）、日本地域開発センター編『ニューサーティの生活と意識（資料編）』（1986）、そして翌年の東京都板橋区編『いたばしコミュニティ白書'87 地域からのメッセージ』（1987）での参加である。筆者の当時の職位は立教大学非常勤講師である。1988年には専修大学文学部に専任講師として就職したため、奥田・広田共訳『シカゴ・ソシオロジー 1920～1932』（ハーベスト社、1990）の仕事は依然として続いたが、奥田・田嶋編『池袋のアジア系外国人』での奥田道大の視点とは異なる「都市エスニシティ論」（移動／越境の人々の個人の生き方に視点をのいた研究）を鶴見で展開した。方法もエスノグラフィを中心にした。

引用文献

- Flick, Uwe, 1995, *QUALITATIVE FORSCHUNG*, Rowohlt Tachenbuch Verlag, Reinberk bel Hamburg=小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『質的研究入門』（2002）春秋社。
- Gergen, K. J, 1994, *Realities and Relationships Soundings in Social Construction*, President and Fellows of Harvard College=永田素彦・深尾誠訳『社会 構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる』（2004）ナカニシヤ出版。
- Gilroy, P, 1996, “British Cultural Studies and the Pitfalls of Identity” in Curran, J., Morley, D. and Walkerdine, V. (eds.) *Cultural Studies and Communication.*, Edward Arnold, 1996; and in Baker, Jr., H. A., Diawara, M. and Lindeborg, R. H. (eds.) *British Cultural Studies A Reader.*, Chicago: The University of Chicago Press, 1996=毛利嘉孝訳「英国のカルチュラル・スタディーズとアイデンティティの落とし穴」『現代思想』（1998）青土社.142-157。
- 藤浪海, 2020, 『沖繩ディアスポラ・ネットワーク——グローバル化のなかで邂逅を果たすウチナナンチュ』明石書店。
- 平井太郎・宮地俊介, 2023, 「奥田道大をめぐるミッシング・リンク」『日本都市社会学会ニュース』No.125（「自由報告部会Ⅲ」於関西大学）。
- 広田康生, 1992, 「コミュニティ施設と地域生活課題の諸様相について——横浜市『地区センター』の機能的実態に関する調査報告として」『専修人文論集』第50号, 専修大学文学部紀要, 73-107。
- 広田康生, 1993, 「都市エスニック・コミュニティの形成と適応の位相について——特に横浜鶴見の日系人コミュニティを対象にして」『社会科学年報』第27号, 専修大学社会科学研究所, 289-325。
- 広田康生, 1997, 『エスニシティと都市』有信堂（絶版）。
- 広田康生, 2004, 『[新版] エスニシティと都市』有信堂。
- 広田康生, 2022, 『「都市エスニシティ論」の『フィールドからの理論』と『行為体-志向の都市社会学』』『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.12, No.2, 53-73。
- 広田康生, 2023, 『「都市エスニシティ論」の『語りの方法』と『理論の世界』——『行為体-志向の都市理論』との『交差点』で』『専修人間科学論集 社会学篇』Vol.13, No.2, 51-74。
- 広田康生・藤原法子, 1993, 「ある調査の記録: フィールド日誌に見る, 鶴見の日系人世界——都市エスニック・コミュニティの形成と自己確証の行方」『専修大学社会科学研究所月報』No.358, 1-43。
- 広田康生・藤原法子共著, 2016, 『トランスナショナル・コミュニティ—場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社。
- 広田研究室編, 2012, 『2012年度「社会調査実習 A, B」調査報告書 トランスナショナル・コミュニティとしてみた新宿大久保・百人町——場所への注目と下からの都市空間形成』芳文社（非売品）。
- 五十嵐泰正, 2019, 『上野新論——変わりゆく街、受け継がれる気質』せりか書房。
- 板橋区編, 1987, 『いたばしコミュニティ白書'87 地域からのメッセージ』板橋区。
- 宮地俊介, 2023, 「日本都市社会学会大会 自由報告Ⅲ 「奥田道大のミッシング・リンク」報告レジメ」。
- 日本地域開発センター, 1983, 『高齢化社会の市民——高年齢者の生きがいと社会参加に関する調査研究報告書』日本地域開発センター。
- 日本地域開発センター編, 1986, 『ニューサーティの生活と意識（資料編）』日本地域開発センター。
- 中筋直哉, 2023, 「都市社会学のコミュニティ論——その論理と現代的課題」吉原直樹編著『都市とモビリティーズ』ミネルヴァ書房, 109-150。
- 奥田道大, 1983, 『都市コミュニティの理論』東京大学出版会。
- 奥田道大, 1995, 『21世紀の都市社会学2 コミュニティとエスニシティ』勁草書房。
- 奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場』東京大学出版会。
- 奥田道大, 2009, 『人びとにとって「都市的なるもの」とは——新都市社会学・序説』ハーベスト社。
- 奥田道大・広田康生, 1985, 「ニューサーティの地域・都市生活——ニューサーティ（団塊の世代）アンケート調査から」東京都生活文化局編, 1985, 『ニューサーティの生活と意識に関する調査研究報告書』東京都生活文化, 49-65。

- 奥田道大・広田康生・田嶋淳子, 1994, 『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店.
- 奥田道大・鈴木久美子, 2001, 『エスノポリス・新宿／池袋——来日10年目のアジア系外国人調査記録』ハーベスト社.
- Portes, A and Böröcz, J, 1989, “Contemporary Immigration : Theoretical Perspectives On Its Determinants And Modes of Incorporation”, *IMR*, Vol.xxiii, No.3, 606-630.
- 阪口毅, 2022, 『流れゆく者たちのコミュニティ——新宿・大久保と集会的な出来事の都市モノグラフ』ナカニシヤ出版.
- 佐藤健二, 2011, 『社会調査史のリテラシー——方法を読む社会学的想像力』新曜社.
- Smith, M P, 2001, *Transnational Urbanism*, Blackwell Publishing.
- Zukin, S, 2010, *Naked City : The Death and life of Authentic Urban Places*, Oxford University Press =内田奈芳美・真野洋介訳『都市はなぜ魂を失ったか』(2013) 講談社.